

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00426

研究課題名（和文）十九世紀フランスにおける汎神論論争に関する研究 文学・哲学・宗教学

研究課題名（英文）Study on the pantheism controversy in 19th century France: literature, philosophy, religion

研究代表者

山崎 敦 (Atsushi, Yamazaki)

中京大学・教養教育研究院・教授

研究者番号：70510791

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、十九世紀中葉のフランス思想界を揺るがせた汎神論論争が、文学・哲学・宗教の各領域に及ぼした影響を解明することにあった。フランス汎神論論争は、文学ではフローベールやジョルジュ・サンド、哲学ではクザンやテーヌ、宗教学では主にルナンに大きなインパクトを与えたが、ドイツ汎神論論争の研究に比べ、フランス汎神論論争の研究は大きく遅れていた。十九世紀フランスの文学史・哲学史・宗教史を横断し、汎神論をめぐる錯綜した論争の経緯を跡づけた。最終年度に国内外の研究者を招いて国際シンポジウムを開催し研究成果を発信した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

十九世紀フランスにおける汎神論論争は、文学史のみならず、思想史や宗教史のなかでもその重要性が見過ごされてきた。本研究はこうした諸領域をまたいで論争の展開をつぶさに跡づけることによって、その多方面に及ぶ影響を解明した。「神即自然」を唱えたスピノザ哲学に淵源する汎神論は、十八世紀を通じて無神論の別名であったが、十九世紀になると、世紀前半は社会主義、世紀後半は実証主義といったぐあいに、その時々思潮と結びつき、新たな火種となった。その意味で汎神論は一貫して「危険思想」であったといえるが、汎神論はいまでもなお命脈を保っており、本研究は現代にまで通じるその歴史的意義の解明を試みた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to elucidate the influence that the pantheism controversy, which rocked the French intellectual world in the mid-nineteenth century, had on literature, philosophy, and religion. The French pantheism controversy had a great impact on Flaubert and George Sand in literature, Cousin and Taine in philosophy, and Renan in religious studies, but compared to research on the German pantheism controversy, research on the French pantheism controversy has lagged far behind. Traversing the history of literature, philosophy, and religion in nineteenth-century France, we have traced the history of the complicated controversy. In the final year, we invited researchers from Japan and abroad to hold an international symposium.

研究分野：フランス十九世紀文学

キーワード：フランス文学 哲学 宗教学 汎神論

1. 研究開始当初の背景

ドイツ汎神論論争の研究に比べ、フランス汎神論論争の研究は大きく立ち遅れていた。さらには、前者が後者に及ぼした影響についても、先行研究は多くはない。それもこれもフランス汎神論論争の思想史上の重要性が見過ごされてきたからであろう。

しかし重要性が見過ごされてきたのは、思想史の文脈においてだけではない。宗教史や文学史、さらには脱宗教化の歴史の文脈でも、汎神論論争やスピノザ汎神論のインパクトは、ほとんど強調されてこなかった。とはいえ、哲学史の枠組みだけで汎神論論争を考察しても、その真の射程を推し量ることはできないだろう。宗教史の枠組みについても同様である。

文学と哲学と宗教を同時に視野におさめた、より広範な視点からこの論争を考察しないかぎり、カトリック教会によって最大の脅威とみなされた汎神論の思想史的意義を明らかにすることはできない。

フローベール(文学)、スピノザやテーヌ(哲学)、ルナン(宗教)のそれぞれについては、国内外に膨大な先行研究の蓄積がある。汎神論論争は、そうした個々の先行研究を有機的に交差させる視座を提供するものであるという確信のもとに本研究課題は構想された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、十九世紀フランスの汎神論論争が、文学・哲学・宗教学にどのように波及したのか、文学史や思想史の観点から解明することにある。汎神論とは、神と世界を同一視する思想体系であり、近代ではスピノザ哲学の別名でもあるが、まず1780年代にドイツでスピノザ汎神論をめぐって論争が起きた。その余波がフランスにも及び、スピノザの仏訳著作集が刊行された1840年代に論争に火が付いた。この論争は、文学ではフローベールやジョルジュ・サンド、哲学ではクザンやテーヌ、宗教学ではルナンに大きなインパクトを与えたが、ドイツ汎神論論争に比べフランス汎神論論争は閑却されてきた。文学史・哲学史・宗教史を横断して、汎神論をめぐる錯綜した論争の経緯を跡づけ、その文学史的・思想史的射程を明らかにする。

3. 研究の方法

年度ごとの研究の方法を示す。

【令和三年(2021年度)】

主として文献の収集・精読に傾注した。

1) 1840年代の汎神論論争に参画した聖職者(マレ神父、グラトリ神父)と哲学者(クザン、セセ、ヴァシュロ、シモン、ブイエ)の論争文を精読し、汎神論論争の全容の解明に努めた。

2) これに関連して十九世紀フランスにおけるドイツ観念論受容の研究に着手した。

【令和四年(2022年度)】

国際シンポジウムにおける研究成果の発表に傾注した。発表は3件となった。

1) 6月パリの発表では、前年度に着手した十九世紀フランスにおけるドイツ観念論受容の研究テーマを展開させるために、クザンの『真・美・善』を正面から取り上げ、十九世紀フランス美学において決定的な役割を果たしたこの哲学書の痕跡や影響を、フローベールの遺著『ブヴァールとペキュシェ』のうちに探った。

2) 12月パリの発表では、『ブヴァールとペキュシェ』を主たる分析対象としたことは6月の発表と変わらないものの、主題については、これを一新して造園術(ピクチャレスク・ガーデン)に定め、汎神論(自然哲学)という本研究課題に新たな切り口からアプローチを試みた。

3) 3月名古屋の発表では、先行する発表をひきつぎ、美学と自然哲学を交差させながら、フローベールの小説を思想史的な観点から読解した。

【令和五年(2023年度)】

最終年度はこれまで同様に研究課題に関連する文献調査を進めながら、年度末に本研究課題の総仕上げとして、十九世紀フランス文学研究の第一人者たるジャック・ネーフ Jacques Neefs(パリ第八大学、ジョンズ・ホプキンス大学名誉教授)を招聘し、立教大学と中京大学において学術イベントを開催した。各学術イベントの概要はつぎのとおりである。

1) 2024年3月5日開催、公開セミナー「フローベール—美学的暴力と共感」(於立教大学)。司会：菅谷憲興(立教大学)、山崎敦(中京大学)。発表者：ジャック・ネーフ(パリ第八大学、ジョンズ・ホプキンス大学名誉教授)。

2) 2024年3月10日開催、国際シンポジウム「文学と汎神論」(於中京大学)。司会：山崎敦(中京大学)、鈴木啓二(東京大学名誉教授)。発表者：村松正隆(北海道大学)、数森寛子(愛知県立芸術大学)、菅谷憲興(立教大学)、ジャック・ネーフ(パリ第八大学、ジョンズ・ホプキンス大学名誉教授)。

4 . 研究成果

上記のように海外の複数のシンポジウムにおいて報告するとともに、研究成果を論文や図書の形にまとめた。具体的には、フローベール文学と哲学事典との関係(雑誌論文「“Mais nous allons tomber dans l'abîme effrayant du scepticisme”」)、折衷主義哲学との関係(図書『Flaubert dans son siècle』所収)、さらに崇高・ピクチャレスク美学との関係(図書『Flaubert en images』所収) などについての論考を発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Atsushi Yamazaki	4. 巻 -
2. 論文標題 "Mais nous allons tomber dans l'abime effrayant du scepticisme": relire l'episode philosophique de Bouvard et Pecuchet a la lumiere du Dictionnaire des sciences philosophiques	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Revue Flaubert	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Atsushi Yamazaki	4. 巻 -
2. 論文標題 Suggestion et mediation : du bovarysme au bouvardisme	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Flaubert. Revue critique et genetique	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山崎敦	4. 巻 -
2. 論文標題 フローベールの反目的論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フローベール 文学と 現代性 の行方	6. 最初と最後の頁 171-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Atsushi Yamazaki
2. 発表標題 Flaubert et l'eclectisme
3. 学会等名 Colloque "Flaubert dans son siecle" (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Atsushi Yamazaki
2. 発表標題 Le pittoresque dans Bouvard et Pecuchet
3. 学会等名 Colloque "Flaubert en images" (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Atsushi Yamazaki
2. 発表標題 Tempetes et orages chez Flaubert
3. 学会等名 Colloque "Le romantisme et la litterature du Second Empire" (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Atsushi Yamazaki	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Presses universitaires de Vincennes	5. 総ページ数 288
3. 書名 Bouvard et Pecuchet, roman philosophique. Une archelogie comique des idees au XIXe siecle	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Litterature et Pantheisme	開催年 2024年～2024年
-------------------------------------	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------